

# Sisterhood (シスターフッド) 論

## —河井道子とその弟子たちの場合から

一 色 義 子

1.

シスターフッド Sisterhood という言葉はなじみが薄いかもしれない。けれども、女性が女性と共に生きることが意識化される時、シスターフッド sisterhood は自覚的に認識される必要がある。ことに女性神学が提唱され、この概念が取り上げられるようになった。

けれども勿論 sister という概念は歴史のはじめからある。旧約聖書創世記においても、おおくの sister が出てくる。それは主に親を同じにする女性どうし（創世記19：30，民数27：1）であり、ある時は片親を同じにする女性どうしを言う姉妹関係である。それに対応する形で兄弟も語られる。旧約聖書でそれを広義に用い、親類の血縁関係にある女性どうし（民数25：18，エレミア3：8）をさす例もある。

今日、女性神学で特に意識化されるシスターフッドは、血族概念がない女性どうしの関係を指す。たとえ血族親族であったとしても、そこにはその係累の観念を排除した概念である。

一般に女性どうしの関係を考えると、三つに分類できよう。1，は女性の美しさ、崇高さを強調した「女神型」、2，は肉体的情感を強調する「エロス型」、そして3，は神のもとにある被造物として互いの関係を意識化する「共生型」と見る事が出来よう。

1の「女神型」においては一方が常に他方よりも優位にたち、他方が常にあこがれをもって崇拜するメンタリティになる。その場合、たとえ相手を神

とは認めないとしても、限りなくあこがれ、それに染まるように欲し、他方の主体性が喪失する。これは父権的社会的思考型と共通する。他方は一方に従属する。

2の「エロス型」においては、肉体が感知しうる情感を強調し、それをもって人間の精神の解放を求める。女性神学が女性の情感をよしとして、縛らなくなり、自由を与えることで、かなりの女性解放をなした。その成果は決してあなどれない。女性の女性性をそなえられたよさ、と認めることは、女性を模擬男性化から救い出すことになった。

さらに、女性の情感を活用した、礼拝形式も生み出され、神礼拝もダンスをとり入れ、歌を取り入れ、花や木を取り入れ、女性の自由な表現で豊かになった。

またそれは、互いに肉体から受ける暖かさ、豊かさ、母の胸にあるような安らぎ、抱擁をもって、受容、癒し、慰め、を与える。

そして何よりも、君臨する重圧的、抑圧的、搾取的男性中心のパターンを排除した、相対性がある。

結婚を媒介にする必要がない。結婚で傷ついた者にも深い女性の受容と慰めが生まれる。

女性も男性も対等に神に創造された者としての存在であると自己理解する時、一方の女性が女性の世界で自由に考え生きる。

父権的男性社会から隔離された豊かな世界が現出できようが、もし男性がくわわれば、たちまち様相をかえるエロスの世界である。

3, の「共生型」においては、その前提として、神は創造者として相い対してその神の関わりの中で神の被造物としての女性と女性が共に生きる関係にある。これが本論で扱う女性神学の視点から焦点をあてるsisterhoodである。そこでは複数の女性の視点をもって神との関係を追求する。

この聖書的前提として、新約聖書の福音書におけるイエスが、その母、兄弟姉妹に対して、イエスの「周りにすわっている人々を見回して『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ』」(マルコ3:34,35) (「天の父の御心をおこなう

人」マタイ12：50)と言い、また「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行く人たちのことである」(ルカ8：21)と述べた。ここに肉親関係への特別視をしりぞけて、肉親関係の相対化が見いだされると共に、すべての人間関係を相対化した。そして「母」「兄弟」「姉妹」とよぶ根拠を神との関係においた。

女性神学からのsisterhoodの根底には、一方でこの神との関係の確立があり、他方で、すべての人間関係は相対化される。これは女性神学の一つの大事な要素である。

こうしてみた時に、女性神学では神学するのが女性もしくは女性の視点からと規定して、神について女性の視点で思い、考え、理解し、説明し、語り、神に祈りつつ互に、「力と資料を分かち<sup>1</sup>」共に生きることが女性神学の領域であるといえる。そこには実存的生の場が生じる。その中での女性どうしがsisterhoodといえよう。

ここで特に焦点をあてたいのは、この女性神学で指摘されるsisterhoodは、互いに平等な立場でともに生きる、共生をめざすのである。共生をめざすということはひいては、その女性と女性の関係とならんで、女性と男性の関係があり、また男性と男性の関係がある。さらに、すべての被造物として、自然、動物、草木、空気、水、様々との関係をないがしろには出来ない。それをも含めて、sisterhood的共生とも広げることも可能と思われる。ただし本論ではその一部ともいうべき、女性と女性の関係のいわば、狭義のシスターフッドを取り上げる。

シスターフッドと英語を用いるのには二つの理由がある。第一にこのコンセプトが英語圏で指摘されはじめたこと、第二にそれを簡単に姉妹観とでも訳してしまうことにためらいを感じるのは、日本における姉妹は上下関係を示唆し、対等関係を失うからである。(一応、女性同士観とでも名付けたとしても、日本歴史の封建的な過去の臭いを連想させ不十分な表現に感じられる。)

Sisterhoodについては、神学の領域に女性神学が指摘されはじめたかなり早い時期、1970年代から、注目され、論じられてきた。

そしてこの場合「共生型」であるが、この同じsisterhoodにも内実に、変

化がある。当初のシスターフッド Sisterhood には、女性が差別されているという認識に立って、ことに R. M. ラッセルは「人種差別の被女を求める力を背景として、シスターフッド（訳文は『姉妹の連携』にルビ）<sup>2</sup>に対する関心は米国 YWCA の中央委員会やインドの YWCA と共に働く中でたかめられていった。」といわれる。被差別という共通の現状から差別に対して怒る「怒り」がもっとも強い契機になっていた。すなわち、それぞれが「敵」視できる対象、問題を見すえて、各自がそういう現状を認識するということで共闘し、その姿勢で連帯した。これは国々、地域それぞれの女性のおかれている現状から、非人権を告発し、国際的にも共闘してきた。今、なお共闘している。

しかし、1980年代になって、そういうシスターフッド Sisterhood に批判的な見方も出てきた。B. フークスは、黒人女性の脊景に立ちながら、

「このように互いに自分たちが犠牲者だということによって結束することはこれらの女性たちにとって心理的品性引き下げになる。女性たちが他の女性たちと力と資料をわかちあいつつ結束することに意義がある。これこそが、フェミニスト運動に関わる女性が奨励すべきことだ。このタイプの結束こそが Sisterhood のエッセンスなのである」<sup>3</sup>

その理由として、自分たちが男性社会における犠牲者意識はそういう共闘している主体の中にも、自分と異なる背景や、人種や、民族、階級に対しての自分たち自身の差別する実態に気づかない。たとえば、白人女性は黒人の現場に対しては、抑圧側にたつ、ということに気づかなかったというのである。こういう人々は自分たちの信念で無条件に誰もが同様な意見を持つように強制しようとする<sup>4</sup>という。

それは同じ様な目的で一斉に立場を取るということにも批判があった。女性をまた一方で、白人女性の中産階級的であるとか、黒人女性に対しては、差別を気づかない、とか、非常に仲間だけに通用させようとしたところに「強制」があったとみた。

そして、しばらく、Sisterhood という表現よりも、「partnership」が用いられるようになった。L. M. ラッセルはそうした流れを予見したように、シスターフッドとパートナーシップの関係を、「真の奉仕や解放という名目のも

とに、誤った支配に打ち勝っていく過程は、サーバントフッドに至る途上でシスターフッドに到達する過程である。」<sup>5</sup>としてさらに、「シスターフッドが美しく力強いことを学ぶことによって、女性はパートナーとして男性と、ともに、危険と犠牲を受け入れる人にとってサーバントフッドが美しく力強いものであることを認めるようになる！」<sup>6</sup>といている。

たしかにこの方が、広義になる。ことにパートナーpartnerとは、究極においてはイエス・キリストにたいしてのpartnerともいわれる。

しかし、現在あえて、もう一度このSisterhoodを再認識し、再解釈する必要があると思われる。それは本当に女性が女性として、十分に自立し、自由に生きることがゆるされているとはっきりした自覚にたって、女性同士が祝福の関係であることを、しっかり女性が知らなければ、本当のパートナーの理解は出来ないとおもわれるからである。

それは、「女性」がただ単に差別される者、抑圧される者としての現象的共通認識に立つのではなく、もっと存在の根源から見直す必要があるのではないかと思われるからである。そこで、もし、シスターフッドSisterhoodを聖書によって導かれるとしたら、どのようなになるだろうか。

## 2.

このシスターフッドSisterhoodの聖書的根拠についてまず探る必要がある。比較的女性のケースが多く出ているといわれるルカ福音書・使徒言行録の伝承を通じてまず見たい。

女性たちのことが複数でしるされている記事は、以下の通りである。

エリサベトとマリア（ルカ1：39-56）、イエスに従った女性たち（ルカ8：10-11）、民衆とともに嘆き悲しむ女性たち（ルカ23：27-28）、十字架のもとにある女性たち（ルカ23：49,55）、復活の朝の女性たち（ルカ24：1-）、イエス昇天後の祈る群れの中の女性たち（使徒言行録1：14）、また女性たちを想定するとして聖霊降臨の場（使徒2：1-4）、信者の生活（使徒2：43,4：32）、タビタという女性（使徒9：36）等がある。ルカ福音書が編集され同じ著者によって使徒言行録が記されたといわれる説をとっての流れである。

これを見るとその当時、(90年代と推定するといわれる)教会形成されていく中で、女性の複数の交わりがあったとみることが出来る。

ルカによる福音書では冒頭に、エリサベトとマリアの関係が浮かび上がってくる。エリサベトとマリアの物語は、公生涯のイエスに出会った女性の物語の範疇には直接は入らないと見ることが出来る。けれども、この物語は古来から名画の題材にされ、美しい二人の女性の出会いの場面が描かれる。その情景を誰もが想像したくなる物語である。「親族」とは言っているが、肉親上の姉妹ではない、世代の違う、関係の違う二人の出会いには女性どうしの敬愛と、信頼、双方が相手を受容する関係がある。ここにシスターフッド Sisterhood の一つの原型を見る。ルカによる福音書だけに残されているこの物語は、ルカ福音書の当初の編集よりも新しい時代に加えられたというのがほぼ定説のようである。

そうしてみると、エリサベトとマリアの出会いの物語りも、イエスに出会って従った女性たちが教会共同体を形成するのに力あった女性の群れがあったし、また形成途上の女性を含む現場から、十分に受け入れられ、納得のいくシスターフッド Sisterhood 物語であったといえよう。

ルカによる福音書にはこの他にイエスを中心としてイエスに出会い、イエスとの対話の中で信仰告白がされている個々の女性の例がいくつかある。そのことは女性がイエスに出会うことで、受容され、存在を肯定され、主体的に信仰をもっていきることが出来た、その自覚があったことがこの基礎にある。そして、更に、そういう女性がただ単に一人で行動したというだけではなく、このように複数の女性たちの交わりを形成していったことを、これらの記事はあきらかにしているといえよう。

イエスに出会ったということは、女性たちに新しい人生の生きる目的をあたえ、その共通の目的によって新しい交わり、共同体、即ちその中にシスターフッド Sisterhood を形成していたといえる。

これはイエスによる福音、解放により、新しく生き、それを他者との関わり、仕えあうという関わりのなかで育成する交わりであったことを意味する。

エリサベトとマリアの物語りはもちろん、バプテスマのヨハネの母となる

エリザベトとイエスの母となるマリアという男性中心の関連でこの二人に焦点が当てられるということも忘れてはならない要素である。この二人の存在はそれぞれが産む子どもによって価値が与えられる、とすれば、父権的価値観に支えられた物語りともいえる。

にもかかわらず、ここに、シスターフッド Sisterhood をみるのは、この女性たちが、旧約聖書の多くの女性のように、一人の男性の二人の妻という関係ではないところに、全く自由な立場で出会っている二人であるところが重要なのである。

年上のエリサベトが若いマリアをうけいれるところが記されている。共通点は二人とも、子を宿した女性として描かれている。子を産むということは、女性として当然のこと、つとめであったし、存在の意味ともうけとられていた社会にあって、女性として祝福でもあったといえる部分と、それが意外に起こった場合の当惑が語られた後で、この場面がある。

男性とか結婚とか家庭とかそうしたこれまでの女性をとりまく絶対的な場として、どんな時にも既往の枠組みであった時代にありながら、この二人の女性は、二人だけの出会いをもって記されている。マリアの賛歌も、けっして、家庭とか、結婚とか、男性とか、によってうごかされたものではない。エリサベトは古来からのうまづめと非難されて人生の大方をすごして、悲しみと苦しみをなめてきた女性でとんでもない時期に子を与えられ、難産のおそれあり、不安を心に神への信頼によって、その時をまっている女性。マリアは神への信仰、信頼によってこそ、この処女懐妊、世間からみれば、後ろ指さされるどころではない石打ちもまぬがれない屈辱的な婚約中の妊娠で、到底常識では耐えられないただひたすら、信仰によってもっとも苦しい立場を十か月耐えなければならない、いや、一生であろう。

マリアは天使ガブリエルにいきなり「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」といわれ、「戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」そこへ、たたみかけるように天使は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい……」と言われる。恵みの結論だが、その過

程の厳しさ。

マリアが「どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」とようやく言えたところに、神の霊の「聖霊」の働きだ、あなたの親族の不妊の女といわれてきたあのエリサベトも年をとっても子を宿し六カ月だ、「神にできないことは何一つない」と。

それに対して、ついにマリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」

マリアが自分をなくした、自分を捨てた、そして、主のはしためと言う奉仕、デアコニアの表現で人生理解、そして、この身になる、という自己の肉体でうけとめる女性の現実理解。これは長い間の出血を癒された女性以上に、自己の肉体にかかわる苦悩と現実を、勇気をもって受けとめている主体的な言動である。

内なる苦悩を秘めてのマリアとエリサベトの出会いで、そのマリアに対してエリサベトは「聖霊に満たされて」

「あなたは女の中で祝福された方です。」

胎内のお子さまも祝福されています」

と、恵みをはっきり宣言している。

これはエリザベトでなければ言えなかった。その受容があったからこそ、次のマリアの賛歌が自然の流れとなる。

その意味でマリアとエリサベトの物語りは神による神との関係の確立がある。

こうして見ると、「共生型」に三つの特色が見いだされる。

1、神との関わり、それが個の関係において、それぞれが神にむかっている。イエス・キリストによる受容はそれぞれの存在根拠を神の受容におく。

2、多様性をみとめあう。女性たちがそれぞれの違いを認めあう。それは各自の独自性の尊重、受容である。

異なるもののありのままの受容である。そこに個の独自性がある。もしこの独自性の確保がなければ、先に警告されたように、sisterhoodの一斉強制となり、再びそれは全体主義的、統一への方向運動となって、画一性と権力



的父権制へ向う。それゆえ自覚すべきはその多様性と各自の独自性の尊重である。

### 3.

河井道子とその弟子たちの場合から

1904年、河井道子29才で、アメリカ、プリンマー女子大学を卒業、日本に帰朝した。1904年9月、津田英学塾に教師として着任した。

このことは、最近公刊された津田梅子の書簡“Attick Letters”<sup>7</sup>に記されている。

”September 27, 1904

School is now in full swing, and I have Miss Kawai here, and it is a very great help indeed.”

こうして河井道子は津田梅子にも津田塾にとっても学生にとっても、多くの期待を寄せられた存在となった。

そして、事実河井道子はその期待に十分こたえられる抜群の英語教育の実力と人格的指導性をもっていた。第1その洋行帰りの洋装から、背丈のすらっとした姿から、寮の廊下で上級生と腕を組んで英語で話していくそぶりから、あこがれの的となった。

その同じ1904年9月に津田英学塾に入学した最年少の学生、渡辺百合16才にとっては目をみはる存在であった。百合はちじれ毛をかくすため油で押さえ、奇妙な姿だったが、ある日洗髪してウェーブが美しいと河井道子にみとめられ、リボンを結んで下さり、それを契機に明るい娘にもどった。

河井道子は米国から帰る時、これから日本の若い女性たちのために、その自立とキリスト教による精神的自主性のために身を捧げようとの決意も強く、さらにその豊かな感性をもって全身全力をもって、教壇にたった。のみならず、学生寮の奥の一室を与えられてもあえて、それに不服をいうどころか、学生を親身になって世話をすることに喜びと使命を感じていた。寮の学生のために、饅頭のご馳走を自室で招いたり、病人が出れば、自ら枕元に座って介抱する。遠足があれば、楽しい替え歌を即興して、みんなで歌う、といった、

当時の厳格な教師像をやぶって、自由闊達に学生を導いた。こうして河井は学生を愛したが、その中心にイエス・キリストの愛を伝えたいとの熱望があった。

それは河井道子が最初から彼女を人間的に慕う女性たちをイエス・キリストに結ぶことを主眼に、キリスト者として、共に生きることへ導いたことでもわかる。共に神の前に被造物としての同じ立場と限界を明らかにし、その最大の福音を他者に伝えるという共通の目的をもって、励まし合う交わりと関わりを形成したといえよう。ここにキリストの愛によるSisterhoodが生まれた。そして、河井道子と共に居る学生たちに、教会へ、水曜の祈禱会、土曜の夜の賛美歌練習と、キリスト教に同行した。津田塾自身、寮の規則で学生は主日礼拝に出席のことに決まっていたが、河井道子と共に一番町教会に連れだって出席するものが多かった。

河井道子はこうして、河井道子を慕う学生たちから、多くのクリスチャンが出た。またクリスチャンの学生は特に祈禱会の祈りなどに用いられて、信仰生活を励まされた。

この学生の群れの中から後に河井道子がYWCAの仕事に携わった時の、横浜YWCAや、大阪YWCAや、各地のYWCAの指導者が生まれ、大きな輪のようになって、河井道子のYWCA時代を共に働いて、シスターフッドのすばらしい輪がひろげられた。更にそれは恵泉女学園創設に先立つ準備の「小さき弟子の群」となって組織して河井を支える女性群となる。

津田に入学し、河井道子に出会って、2年後、百合は夏休みに郷里の教会で洗礼を受けた。それに出席するという河井道子の喜びの手紙が残っている。しかし、急務があって、河井道子は結果的には出席できなかった。その詫び状も残っている。キリスト者として、同じ道を歩むということに、河井道子は無上の喜びを示している。また、百合が郷里の教会を選び、洗礼が一番町教会でなかったことに、百合の自主性をみる。二人は一つ信仰の道を誠実に貫いたし、そして、ほとんど一つの人生の歩みをしたが、信仰の形態においては、それぞれに独自性が顕著であった。

河井道子がこうして慕う学生たちに、くり返し書いたことは、「神が共にい

ます」ということと、「第一河井と言うものを忘れて神様を第一に貴女の頭におき上成事何より大切」<sup>8</sup>と記し、また「貴女や外の人々の祈りにてかく私が守られめぐまれて居ると常に思ひます。……私の様な弱き者には友情、同情が喜しくないものですか。深く感謝して居ります。併余り思ひすぎなさと失望します。キリストの外に完全なものはありません」<sup>9</sup>と記している。

こうして人間関係を神の前にひとしく並んで存在する者として確立しようとした。

この努力と、それを表明することを通して「女神型」にも「エロス型」にも、転向しないSisterhoodへの育成に至ることになったと思われる。

河井道子はやがて、津田塾に通える千駄ヶ谷に一軒の家を持ち、度々伊勢山田市から上京して長逗留する母のためにも、手伝いをおいて生活をはじめた。百合は津田塾の学生であったが、この河井の家に同居した。そして津田塾卒業の年まで一緒に生活し、一緒に津田に通った。河井道子の実行力が百合の実行力か、よいと決めた事は万難を廃して実現する二人の生き方が、すでにこの頃からあらわれている。

1909年、百合の卒業まえ、河井道子が俄かに海外の要請に応じて、ヨーロッパに派遣されることになり、家はたたまれ、百合は津田塾の寮にもどった。

津田塾の卒業試験及びその判定は厳格であったので、勉強もあり、師とたのむ河井は居なく、百合にとっては厳しい時であった。加えて、誰しも厳しい時期であり、誤解や、小事件が重なった。

河井は百合に、実に頻繁に手紙を書いた。百合もよく書いたようである。後年の筆不精からは想像できない細やかさで、ニュースをもれなく手紙にしたためたようである。河井道子の私信は実に事細かに報告型、今でいえば親しい者同志がその日のことを電話で話し合うような雰囲気がある。

百合の卒業直前の手紙に対して道子は「しかし、わたしたちは人格が前進するように、神から絶えず試練をうけているのです。たしかに試練はその当座には快いものではありません。けれども後になってそれらを経験し、そして、私たちがそれらを越えられるだけ強くなったことを感謝できるからです。

イエスご自身がいかに、敵からではなくご自身の使徒から裏切られ、彼の

愛したペトロ、ヨハネその他から否認されたか（知らないといわれたか）を考えてごらん下さい。

他の人をゆるしなさい、ゆるすばかりでなく彼らのために祈りなさい、そしてあなたの祈りはあなた自身にとって恵みとなるのです。ともだちが知っていてまた知らずして私たちにしたいやなことを私たちはわすれようとしようではありませんか？イエスは「他者を70の7倍ゆるしなさい」といわれました。そして、イエスは最後の時、敵のために祈られました。その足跡に私たちもついていこうではありませんか？私たちはイエスを知っていて、私たちの理想として仰ぎ見ることができるとはなんと私たちは幸せでしょう。彼はけっして決して私たちを裏切られない、そして、その子ども達を愛することを決してやめられません。」<sup>10</sup>（原文英語）

長い手紙の一節だが、ここで河井は「あなたは」という上のものが下のものにアドバイスをする調子ではなくて「私たちは」と自分をふくめて同格の者として勧めている。それは共に人生を生きようとするSisterhoodの姿勢である。これは百合は津田英学塾の卒業の直前で、まだ教師と学生の関係であったが、河井の姿勢にはアドバイスをしながら、自分をふくめた姿勢で語っている。

これは20年後、河井と百合がYWCAで同労者として働いた後に、河井がYWCAを辞して、外国へ向かって船出した、いわば道子にとっていちばん辛かった時の手紙に同様な調子がみられる。

当時、手紙は2日おきに投函されている。

「親愛なるゆりちゃん！3月3日夕7時半（出帆直後）

キリストが十字架をおいつつなお病める人をいやし、悩む人になぐさめを与えようとされたか——私たちも」<sup>11</sup>

どんなことがあっても、河井は義憤こそ感じたが、人々に対して、いかりとはしなかった。ゆるそうとした。

またローマの信徒への手紙12章をひいた。

「お互いに祈りが私どもを強くするでしょう。どうぞ神によってうちかってください。今朝で十二回の講演をおわりました。神の力でできました。貴女

も私と一緒にかと思うとうれしくはたりましたよ。祈る力の大きなにはおどろきます。」<sup>12</sup>

もとより、河井はヨーロッパであり、百合は東京であったからこれは心において共にいるという確証を祈りによって得ている意味である。

ここで明らかなのは、神に互いのことを互いに祈り、それによって一つの思いにつながるという姿勢である。更に恵泉女学園を創設して学生・生徒の信和会のモットーに「我らは神と共に働く者なり」を選んでいる。これが、49年間の愛の友情をつらぬかせたシスターフッドの所以といえよう。

第2の点は、独自性である。河井道子と百合の関係にみられる特徴はその、互いのユニークさ、独自性である。河井道子に独創性と独自性があるということはだれしも認めるところであろう。そして、河井の弟子たちはその河井の様々な面を、敬愛し尊敬するあまりに河井に似てきたり、真似たり、同じようになろうとしたりする者もあった。ところが、最も身近に生活していた百合は全く違った。彼女は不思議に自分の独自性を保った。河井道子に似ようとも、真似ようともしないどころか常に彼女自身であった。もしかすると、これが、49年間一度も関わりを中止せず、ゆるがなかった秘訣かもしれない。そして、それが、シスターフッドの特性である独自性だといえよう。

河井道子の蔭にあって支えようと、百合はできる限り裏方に回ろうとした。手伝いの人の見たところでは河井のほうが家庭的で、家事の指図をし、百合のほうが「坊ちゃん」と愛称されたという。しかし、諸種のプログラムを計画実施したりする行動力と実行力はあったようだ。良心的で、自分の信念に忠実であった。百合もいっしょに仕事をした人々、当時の学生たちにたいへん敬愛された。明るく、ユーモアたっぷりで、気がおけなく、お人好し。反応が早く、楽しかった。河井と二人でよく笑った。共通点はそのユーモアと大笑いの楽しさだった。しかし、百合の鋭い感覚と決断と実行力は無言で発揮され、表面からは覆われていた。井深梶之助夫妻によって結婚した決断も、生涯独身だった河井道子とは別の独自の歩をした。しかし、それが河井道子を支える点でマイナスにならないように、彼女なりの努力と、決断と、実行に移し、シスターフッドの初志貫徹を、互いに努めた。結婚後も再び一緒に

住み、また、近くに家をたて生涯、日夜もっとも近い距離にあって、共に生きた。

河井道子のためにと、よかれと思うことをみな実行した。河井も人のために時間も、能力も、財力も限りを注ぐ人であったが、百合も河井道子のために惜しむものはなかった。しかし、河井道子の最後の病気が発見されたのは、留守番こそしても近年には一度も河井道子をおいて外国へ行ったことがなかった百合が生涯の念願のもう一度米国への旅行を大陸の半ばまで到達したところで、目的のニューヨークにも行かず、河井道子の病気を知って引き返した。神の摂理とうけとめるには実に気の毒だった。しかし、百合と夫は一言の不平もなく即刻帰国した。それを河井は深く喜んで、「百合を送ってくれて有り難う」という手術前夜の河井の絶筆は百合の夫あての英語での感謝の手紙だった。

河井道子は日本女性として、希にみる勇氣あるクリスチャン指導者であり、教育者であり、キリスト教の国際社会で知られた指導者の一人であった。百合自身津田塾を卒業し、明治末期、アールム大学最初の日本女性として留学、卒業し、津田塾や恵泉女学園旧制専門学校英文科を数年だが教え、YWCA学生部幹事、講演等もしたが、河井道子の賜物を終生、尊重し、同時に自らは独自性をかえなかった。

河井道子が最後の病床の数日に、半ば譫言であったが、「むずかしいキリスト教の事について研究するように私がいっただのはわかったと思うの……。ほんとに、ごめんなさい。」と云ったことに、百合は信仰のことを口にしない百合の信仰に絶対の信頼をおかれた結論の暗示を読みとった。また苦しみはひどかったが、「すべて神にお祈りしておまかせしましょう……。私は牧師になったの、あなたは知らなかったの？……。神様がボードをくださったの。その板によって、貴女と二人で、この苦痛からのがれましょう。」

一人の人の夢うつつで語る言葉は、現実の思想とはうけとれないかもしれない。しかし、それだけに、その人の自由な調整で整えて語る事のできない時に、心の内面を現しているともいえよう。神からはなれなかった魂、神に受容されている信頼と豊かさ、そしてまた、神によって貴女と二人で苦痛か

ら逃れようという共に生きる存在としての二人の関係。死に瀕していても、「共生型」のシスターフッドの平安をここに見いだす。

恵泉女学園大学の真髄にずっとあってほしい恵泉女学園大学の精神の一つとして、恵泉女学園大学から出ていく女性たちは、この地球社会を担う力となる働きをする女性であってほしいと同時に、その女性たちが自立し、かつ互いの独自性を認め合い、民族、国境のわたかまりを超えて、女性どうし支えあい、生きる限り愛を注ぎ合う愛の源泉の力となるSisterhoodシスターフッドがあってほしいとの希望をこめて、これを記す。

## 注

1. Hooks, Bell *Feminist Theology : From Margin to Center* South Erd Press (1984) p. 4・5
2. Russell, Letty M. *Human Liberation in a Feminist Perspective - A Theology* West Minster Press (1974)  
「自由への旅—女性からみた人間の解放」 秋田聖子・奥田暁子・横山杉子訳 新教出版社 (1984) 邦訳 p. 13
3. Hooks, Bell 上掲書 p. 45 (筆者, 邦訳)
4. Hooks, Bell 上掲書 p. 46
5. Russell, Letty M. 上掲書 p. 164
6. 同 p. 165
7. Tsuda, Ume "Attic Letters" p. 417
8. 河井道子書簡 1908年7月23日付け (渡邊百合宛)
9. 河井道子書簡 1909年9月13日付け (渡邊百合宛)
10. 河井道子書簡 1909年3月4日付け (渡邊百合宛)
11. 河井道子書簡 1926年3月3日付け (渡邊百合宛)
12. 河井道子書簡 1962年
13. 拙書 「愛の人河井道子先生」 創元社 (1953) p. 188